

栄光

説教

『開かれて、神に聞く耳』

イザヤ書35章1節～10節
マルコによる福音書7章31節～37節

狩野進之佑

説教・「開かれて、神に聞く耳」	狩野伝道師……1
特集・ファミリーヒストリーそして、自分のこと……	2
成人祝儀式……	5
追悼・藤田ふさ子姉……	5
説教・「服従」	
岸牧師……	6
伝道師の書き込み……	7
牧師の書斎から……	7
長老のファイル……	8

教会は聖書の言葉を、また聖書

について語る説教を、神の言葉として聞いています。教会にとって

は当たり前のことでありつつも、

これは実に不思議なことです。人間の言語で、人間の口から出ている言葉を、なお神の言葉として受け取っているのです。これは教えられれば誰にでもできるといっても

ではありません。もしも教えられてできることなら、キリスト教を伝えることはこれほど難しくは

なかったでしょう。それでも不思議なことには私たちが神の言葉を聞くことができるようにされています。

それは、他ならぬ神ご自身が、私たちの耳を「神に聞く耳」としているからです。

聖書には耳の聞こえなかった人が、主イエスによって癒やされる

という出来事が記されています。

主イエスが人を癒やしたことは聖書において何度も出てくることです。しかしこの耳の聞こえない人の癒やしについては、これはよくあるお話というのではなく、もう少し後にまで続く一貫したテーマのもとにまとめられたものでもあります。「信仰の目が開かれること、耳が開かれることはどういうことか」というテーマです。

今日の聖書の言葉より少し後に、主イエスにつき従っていた弟子たちが主イエスに怒られる話が出てきます。そのとき「目があっても見えないのか、耳があっても聞かないのか」(マルコ8・18)

と怒られています。主イエスを近くで見ていたはずの人、普通の生活を捨てて主イエスについて行っ

た人たちが、実はイエス様のことを見ていない、聞いていなかった。それならば、どういう人が神様を見ていて、聞いていると言えるのだろうか、そういう問いがここにはあります。人が信仰を得るとしたら、神の言葉を神の言葉として聞き、神を見上げながら歩むことができるとしたら、それは何によるか。弟子たちのような自分の決断、この人についていこうという確固たる意思さえも、結局信仰の目と耳を開くことはありませんでした。ほかの何でもなく神によらなければ、信仰は開かれないのです。

こればかりは神の不思議に属して、人の手でどうにかすることはできません。けれども、それは私たちが信仰のために何もできないということでもありません。

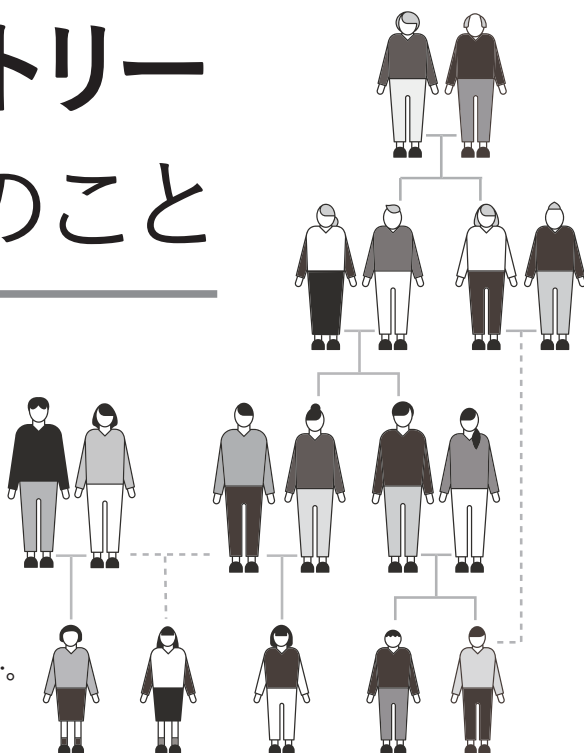
「人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った」(32節)。主イエスのおられるところに連れてくること、神に願うことが私たちにできます。この人の耳を開いてください、あなたの声に耳を傾ける人としてください

と、心から願うことができます。そしてこれこそが、頼りないように思えるかもしれませんが、私たちの最善策です。私たちよりずっと神様の方が上手くやれるに違いないのですから。

主イエスに耳を開かれた人は、同時に舌のもつれが解かれたと書かれています。聴覚に問題があると、言葉を発することが上手くいかないものですが、それも癒やされたということです。耳が開かれることと同じように、これも信仰に関わることではないかと思えます。私たちは教会で讃美歌を歌います。讃美歌は誰でも、それこそ信仰が無くても歌えるものではあります。けれども歌を用いて「神を賛美すること」は神の声に聴く耳を与えられた人間にだけ、神様によって舌のもつれが解かれた人間にだけできることです。歌の上手い下手ではなく、信仰こそが讃美歌を本物の讃美歌たらしめるものです。神に耳を開かれ、舌を解かれた私たちは喜んで賛美していきましょう。「この方のなさったことはすべて、すばらしい」(37節)と。

ファミリーヒストリー そして、自分のこと

「イエス・キリストの系図」は
聖書を探せば出て来ますが、自分のことは？
知っていることもあるけれど、知らないことも。
系図、とまではいかなくても
自分のこんなところは誰々にそっくりだ
ということはありませんか。
似なくてもいいのに、と思うところが似てしまったり…。
やっぱり、家族です。



百日紅に想う

門田浩一郎

梅ヶ丘の羽根木公園に、枝ぶりがよく、幹の太い立派な一本の百日紅の樹があります。夏になると一面が緑で茂る中、赤い花がひと際目に映ります。27年前、祖父・門田耕成の家を引き継ぎ建て替える際、玄関に植えられていた樹でした。打ち捨てられてしまうには忍びなく、区に寄贈しました。昔の家や祖父を忍び、梅ヶ丘に行くとその樹に会って参ります。

祖父も祖母もルーツは高知県です。門田という姓は、全国的にはメジャーな姓ではありませんが、高知県では比較的多い姓で、かの坂本龍馬の友人にも門田姓の人がおりました。「経堂北教会40年史」を見ると、昭和12年の経堂伝道所発足時に祖父・祖母が会員となり、祖父が長老をしていたことが書かれています。戦後すぐには高知教会にも属しており、「高知教会100年史」によると、祖父は復興副委

員長として、教会財政の再建と会堂復旧に携わっていたようです。現在、祖父母の遺骨は高知教会の共同墓地に入れて頂いております。

そのような、クリスチャンホームと言える家に生まれ、幼い日には教会学校にも通っていた私ですが、小6の頃に祖父の家を離れることになり、教会にも行かなくなりました。それから20年近く主と教会生活から離れていたと思います。いわば、ルカによる福音書にある「放蕩息子」のように、父親から離れて放浪していたようなものです。世田谷に戻ったことを機に教会に通うようになったものの、その後もしばしば教会から遠ざかることもありました。

再び主の元に迎え入れられ、夫婦で礼拝を守っておりますこと、不思議に思っております。

母も一昨年は足腰のリハビリで病院、施設にりましたが、手術等を受ける必要もなく、3月に家に戻ってからは週2回のデイホームにも通っており、主に守られた生活を送っております。

主のお導きとお守りに感謝し、日々を過ごしております。

ファミリーヒストリー
そして自分のこと

稲葉美津子

祖父・赤木正雄は、1887年兵庫県豊岡（当時この一帯は円山川が氾濫を繰り返していた）に生まれ、一高に進学した年に東海地方で台風の豪雨被害を受けた。時の校長新渡戸稲造の「君たちの中で砂防を志す者はいないか」に感じ、砂防を志す。今の東大農学部卒業後内務省で砂防事業を手掛け、オーストリアへ留学。帰国後、全国の新砂防事業を指導する責任者となり、砂防協会を創設します。立山砂防にも携わり、全国の土砂災害防止に尽力しました。クリスチャンで世界平和と日本の開明に貢献した新渡戸稲造を尊敬していた祖父は、信徒にはならなかったものの聖書は読んでいたようです。赤木家は仏教徒ですが、兄は大学時代、親友の導きで柿ノ木板教会で洗礼を受け、母も私も続いて受洗した時、祖父から何の反発がな

かったのも今思えば納得できます。

父は私が幼稚園の時、TBSがテレビ放送を開設する時、技術者として米国へ行き、帰国後、技術を担当しました。当時は映像も安定せず、画像が乱れると休日でも会社へ飛んでいきました。家には不在が多く、教会へ誘うという発想は母もなかったようです。父は学生時代ラグビーの選手で俊足、運動好きだったので、多忙でも運動会には全参加、保護者競技では必ず1等でした。足の速さは子どもは誰も受け継がなかったですが、運動という点では私が卓球を中学から大学まで続け、30年のブランクの後、今も続けているのは父の影響があるかもしれません。

母は2男7女の次女として生まれました。祖父は、貿易商としてペルーで活動し、母が7才の時帰国。教育熱心で娘全員を大学まで行かせました。母は本が好き、勉強も何でもよく出来る人でした。聖書も通読、ある日「昨日、急に目の前が眩いくらいに明るくなり、イエス様が現れたの。優しくほほ笑んでいらした」と言い、私を驚愕させました。

親から子へ

河野紘典

「戦国大名の中に河野家というのが愛媛県にいたんだけど、それが僕の祖先にあたるんだよ。ただ、この河野家は『信長の野望』という天下統一を目指すゲーム中でめちゃくちゃ弱いんだよね」と中学校で社会科を教える私は、戦国時代の学習時に毎回話をします。生徒の反応は実に色々で「それ、駄目じゃん」と言う子もいれば、「いや戦国大名とかすごくない？」と言う子もいて楽しいです。そして、自分の祖先は何だったのか気になって家で聞いてきてくれて、次の授業の時に教えてくれます。別に知ったところで今の日常が変化するわけではないが、やはり自分のルーツを知りたいと思うものですよ。

祖先とのつながりというのは不思議なもので、私が教職の道を進むと決めた時、私の父や祖父はサラリーマンであり、教職とは全く

関係ない道を歩んでいました。ただ、親戚に私と同じ教職の道に進んだ人がいたということを知っただけで、なぜか心強く思い、自分の進むべき道に自信を持ったこともありました。

今回、ファミリーヒストリーを振り返る中で、両親は勿論、親戚や祖先の影響を色々受けながら今の自分に至るんだと改めて感じる事ができました。

昨年8月に娘が誕生してくれて、父親になりました。そんな娘との関わりの中でも、自分が父親としてどうあるべきか考える暇なく、気がつけば、自分が父親にしろもらった関わり方を、娘としていることに、ふと気付くことがあります。結局、似たくなくても自然と親に似てしまうもので、娘も私に似てしまうのでしょうか。

ただ、このコロナ禍で一緒の時間を過ごすことができるからこそ、似てしまうと思うと、当たり前今の今ある日常に感謝しながら、娘と過ごす時間を大切にしていきたいと思います。

家族と自分について

仲山亜砂奈

最初に両親と祖父母について、お話しします。

父は北海道で六人兄弟の六男として生まれて、遅く育ちました。正直で努力家です。

祖父は存在感があつて近寄りがたい印象もありましたが、小さい私を膝の上に乗せて可愛がつてくれました。

祖母はいつも笑顔で、いっぱいお菓子をくれました。

毎年夏休みに祖父母が呼び寄せてくれたので、伯父、伯母、いとこたちとも楽しく過ごした思い出があります。

母は大阪府で一人っ子として生まれて、のんびりと育ちました。明るくて前向きです。

母方の祖父は初孫の兄が生まれて、私が母の胎内にいる時に他界しました。スラッとしていて優しかったそうです。

祖母はお茶目で活発でした。よ

くだこ焼きを作ってくれて、食べるのが楽しみでした。淡路島出身で、東京に行きたいと思っていました。祖母の思いが通じたのか、祖父の転勤により母が小学生の時に一家で上京しました。

次は兄弟について、お話しします。一歳上の兄は面倒見が良くて優しいです。習い事へ通ったり、遊んだり、一緒に育ちました。

五歳下の弟は真つ直ぐな頑張り屋です。何度か弟のバスケットの試合を応援して、成長を見守ってきました。

母と顔が似ていると言われますが、写真の私は父と雰囲気似ています。兄弟も顔や表情が両親に似ています。

最後は気づいた点について、お話しします。

両親の兄弟や親戚の仲が良いので、父方のいとこたちや母方のはとこたちとも交流があります。先祖や親戚の存在があつて自分がいることに改めて気づきました。

今回このような機会をいただきました。ありがとうございます。これからも日々祈り、歩んでいきたいと思っています。

近況

山口哲生

の幅が広がりました。かつ、再び発せられた緊急事態宣言の中で、休日は体を休めることを念頭に置かざるを得ないことから、仕事以外で外出することが少なくなっています。

これでは良くないと思いながらも、今は様々な時間に仕事したり休憩したり、朝が早い場合は会社に前泊したりと体を慣らしていくのは並大抵ではありません。どうすれば良いのかという答えを見い出すには、ひたすら仕事をこなし、いくことが大事になってくるかと思っています。

おかげさまで入社時のミニバス営業係から昨春秋に大型バス営業係に登用となり、営業所で受け持つ一般路線を全て担当することができるようになりました。子どもの頃の憧れていた仕事であった一つがようやく現実となった今、両親がいるうちに一度はその姿を見てもええなラと思ひながら、今日も安全運転に努めていきます。

それが神様から与えていただいた使命として、務めていきますので、今後ともよろしく願ひします。

成人祝福式

成人式を迎えて

網川詩織

私にとって家族の延長のような
経堂北教会で成人を祝っていただ
き、とてもうれしく思います。小
さい頃は楽しく教会学校に通っ
ていましたが、最近では怠け心もあ
って時々しか行かなくなりまし
た。それでもいつも温かく迎えて
くださりありがとうございました。
世田谷区の成人式は式典の配信の
みとなったので、振袖を着る機会
が与えられてよかったです。教会
の皆さんに振袖をほめられて少し
照れくさい感じでした。

私は21世紀になって生まれまし
た。2001年3月7日生まれで
す。だから厳密に言えばまだ19歳、
あと少しで20歳になります。振り
返れば、20年間にいろいろなこと
がありました。家族の病気や東日
本大震災などの衝撃の出来事があ
りました。進路を決める時もちっ
も大変でした。その度に家族や、
まわりの人たちに支えられてきま
した。そして、コロナ禍でのこの
1年もまた、これまでの当たり前

を覆す衝撃の年でした。大学がす
べてリモート授業となってキャン
パスに1年間行っていない。ず
っと家にいて、すべての単位を
取りました。部活動もほぼ無しに
なりました。大学に行きたいと強
く思っていました。1年間我慢
を余儀なくされました。学校に行
って友達と過ごすという、当たり
前だと思っていたことが実はとて
も恵まれたことだったと知り、そ
れらに感謝もせずに生きていたこ
とを知らされました。これから大
人として社会に出ていく時、これ
らの経験を生かしていかなくても
なりません。与えられた恵みに感
謝することを忘れないように、そ
して何が自分に出来るかをよく考
えて歩んでいきたいと思っています。

追悼

頌栄

故・
藤田ふさ子姉

藤田ふさ子さんは、1月1日夕
刻天に召されました。12月4日に
百歳の誕生日を迎えたばかりでし
た。若い日に与えられた信仰によ
って百年の生涯を生き抜きまし
た。その信仰の種は、1937年
神戸の頌栄保育専攻学校（現在の
学校法人頌栄保育学院）に入学し、
校長のキャサリン・アカナ先生と
の出会いにより、ふさ子さんの心
に蒔かれました。

翌年日本メソジスト兵庫教会で
受洗、夫の光男さん（2008年
逝去）は青年会の仲間でした。結
婚は主の御心であり、主の栄光を
現すためだったと後年よく話して
くださいました。

光男さんが働き盛りのただ中で
病で倒れた時、家族を支えるため、
家庭裁判所の調停委員の職を新聞
で見つけ、10年務めました。裁判

官からも信頼され、辞める時は大
変惜しまれたとのことでした。

当教会には御夫妻で、1995
年に転会しました。転会式では讃
美歌を歌いながら、「遠い旅から
やっと帰るべき所へ帰って来た
という心の安らぎを覚え、また温
かいぬくもりをしみじみと感じ」、
初心にかえって教会生活を新たに
始める決心をしました。

御夫妻で牧師をお宅によく招い
てくださいました。光男さんは御
自分の死と葬儀について希望を語
り、ふさ子さんは全て主にお任せ
しているという印象でした。

頌栄保育専攻学校の名称は、子
どもに仕える保育の業が神の栄光
を現すものであるようにとの祈り
が込められた名称だと聞いていま
す。ふさ子さんは、その生涯が神
の栄光を現すものであるようにと
祈る日々だったことでしょう。神
の栄光に照らされて自らの歩みを
振り返り、悔い改めるべきことを
悔い改め、赦しを求めることもあ
ったことでしょう。ふさ子さんは
その信仰によって、造り主のおら
れる天の国Ⅱ真の故郷に帰ること
ができました。

(岸 俊彦)

説 教

『服従』

ゼカリヤ書8章20節～23節
ペトロの手紙一 2章13節～17節

岸 俊彦

ペトロの時代、教会とそこに集まる者たちは周りから色眼鏡で見られ、悪人呼ばわりされました。大迫害に直面していたわけではありませんが、様々な試練がありました。その際かえって「世間に認められるよう立派な行いをしなさい」とペトロは勧めました。「主のために、すべて人間の立てた制度に従う」（2・13）のです。

「すべて人間の立てた制度」は神の被造物です（ローマ13・1）。私たちからは計りがたい御心の中で、皇帝も総督も用いられず。神を信じて、この世の秩序に服従することが私たちに勧められます。問題のある制度でも、「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」（ローマ12・21）との道が備えられています。「何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」（1コリント10・31）との教えに生きるの

です。「何をするにも、人に対してではなく、主に對してするよう、心から行う」（コロサイ3・23）ならば、キリスト者を悪人呼ばわりした人たちを黙らせ、いつの日か彼らも神を崇めるようになるでしょう（1ペトロ2・12）。

ペトロは、「自由な人として生活しなさい」（同2・16）と勧めます。自分の願い通り、思い通りに生きるのが自由なのでしょう。か。「魂に戦いを挑む肉の欲」に従つてよいのでしょうか。私たちは「罪に仕える奴隷となつて死に至るか、神に従順に仕える奴隷となつて義に至るか、どちらかなのです」（ローマ6・16）。私たちは「神の僕として行動」できるので。「すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏れ、皇帝を敬う」（1ペトロ2・17）ことができます。「服従する」とは、ギリシャ語では「下に置く」が元々の意味で

す。神の下に自らを置く者は、人の下にも置くことができます。「敬う」というのは、自分が相手より上だと思つたら敬うことはできません。獄中のパウロが語っていました。「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだつて、互いに相手を自分よりも優れた者と考へ、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい」（フィリピ2・3～5）。

この模範がキリストです（同2・6～11、ヘブライ5・7～10）。私たちが主の御前に謙遜に生きることができるようにと、キリストは十字架にその命を注いでくださいました。私たちがキリストの命に生きるようにと死者の中から復活してくださいました。罪と死から私たちを解放し、自分自身からも自由になつて神の僕として、この世にあつて謙遜に生きるようになるためです。

キリストがその生涯をかけて教えてくださいました。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕にな

りなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」（マルコ10・43～45）。

私たちは、まず教会の兄弟姉妹の中で謙遜になつて仕え合うことから始めるのです。そして皇帝を敬うことも出来るはず。キリストは皇帝のためにも死なれたからです。御心に従い、全てのの人に仕え、真の謙遜を生きたキリストに私たちは服従するのです。

ペトロは「主のために」（1ペトロ2・13）と語りました。主イエス・キリストのゆえに、この世の人間の制度や機構に従い、仕えることができますと励まします。主の御心によつて、聖霊の導きに従い、私たちは主の僕として用いられ、私たちが主の僕として私たちを買い取つてくださった主がその僕として、私たちを用いてくださいます。

主の御手の業は、私たちからは計り知ることが出来ません。私たちを用いてくださる主の御手の業を、大いに期待して待ち望みましょう。御心が実現しますように。

伝道師の書き込み

1月より非常事態宣言が再度発令されましたが、教会の様子は大きくは変わっていません。おおよそは非常事態宣言発令前と変わらずにやっています。帰省も目立って外出しておりませんので、私の生活もさほど変化がありません。そういうわけでいつもの通りあまり書くべきことはありません。

教会の様子は大きくは変わりませんでしたが、小さくは変わって

います。4月、5月ほどではないのですが、礼拝出席は少し減りました。代わりにライブ配信の視聴者が増えました。日曜日の会堂は少しだけ静かになりました。集会については週報・月報などでお知らせのとおり、夜の祈祷会を朝の時間に移動した程度の変化です。私が少し楽をさせていただいていることとか、時間の都合で顔ぶれが変わったこととか、そういう変化はありますが、会は無事に続けられております。

さらに小さな変化を挙げるな

ら、掲示物の様子が少し変わりました。12月にはたくさんのクリスマスカードが送られてきますので、それを掲示しています。普段は掲示作業一つにそう心動くことはありませんが、たくさんのクリスマスカードを掲示している時は、なんだか楽しい気分になってきます。掲示期間は1ヶ月なので、カードを片付ける1月の終わりは少し寂しく感じるほどです。今はちょうど入れ替わりの時期に送られてきた、たくさんの方の献金の領収書を掲示していま

す。月報記載の通り29か所に送っていますので、並べて掲示すると掲示板1枚がまるまる埋まるくらいになります。これはこれで趣があるように思います。色々な教会・団体の働きと祈りの輪の中に自分たちがあるということを感じさせられるものですから。

例年であれば今は餅つきをしている時期でしたが、これは残念ながらできません。来年の同じ頃にはまた気兼ねなく、そういうことも再開できると良いのですが。

(狩野進之佑)

牧師の書斎から



教会の礼拝や集会は注意しながらいつものように行われていますが、教区や教団の会議はオンラインがほとんどです。2月に行われる常議員会に報告・提案をするため委員会が頻繁に行われています。春の教区総会、秋の教団総会の準備にもすでに取りかかり、スケジュール調整も行われています。ただ緊急事態宣言はどうなるのか、ワクチン接種は行われるのか、コ

ロナ禍はいつ終息するのか、不確定なため中々協議が進みません。説教や集会の準備は落ち着いて集中しないとできません。まとまった時間も必要です。それで委員会の合間の半端な時間には、CDからリップングをしています。リップングとはCDのデータをパソコンで読み取り記録することです。修理したCDプレーヤーが壊れたことはこの欄で触れました。次はネットワークプレーヤーを購入したいとまで書きました。しかし、機種を調べて購入する時間がなか

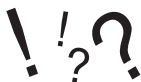
なかとれません。リップングだとCD 70分の音楽を数分でデータ化できます。それをスマホやパソコン、またネットワークプレーヤーなどの機器によってヘッドホンで聴くことができます。

リップングの便利な点は、CDのデータをきちんと整理できることです。CDの表紙カバーも画像として、曲、演奏者などのデータと共にモニターで見ることができ、分類のルール化さえきちんとすれば、PCソフトが自動的に分類してくれます。

以前CDを整理しようとデータベース化を試みたことがありましたが、データを入力するのが面倒で挫折しました。ところが特に海外のCDには曲データとともに、曲名や演奏時間まで文字データも登録されているのです。ようやくこの便利さに気づいたところです。

1ヶ月で700枚リップングしました。すべてリップングするのはあと2ヶ月はかからないでしょう。音質はともかくパソコンをクリックすれば自由自在に音楽を聴くことができます。(岸 俊彦)

個人消息



編集後記



▽まだまだ続くこのコロナ禍で、出口の見えない日々を送っている私たちですが、陽差しは確実に春へと向かっています。(沢田)

▽早春には讃美歌 21・575 番「球根の中には」の歌詞がよく心に浮かびます。今年は 2 番の「沈黙はやがて 歌に変えられ、深い闇の中 夜明け近づく。…その日、その時をただ神が知る」が殊更に響きます。(原^典)

▽娘は大学受験の真っ最中です。次号が出る頃には笑顔でいられますように。(酒井)

▽コロナ禍で主人が在宅ワークに。昼食まで作らねばなくなり、それもあって自分の仕事も捗らず、ついイラッとする毎日です…。ということで、お互いの精神安定のために主人から昼食代を徴収することにしました(笑)。(尾崎)

「栄 光」2021 年 2 月号

日本基督教団 経堂北教会

〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11

電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038

牧 師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑

編 集：栄光編集委員会

Email：kyodon@nifty.com

HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

長老のファイル



日本で新型コロナウイルス感染症の感染者が確認されてから、1 年が経過した。昨年この時期は、コロナ関連の報道が増え始め、「ダイヤモンド・プリンセス号」内での集団感染により、世の中の緊張感が高まりつつあった。そうした状況でも、昨年 2 月にはルデヤ会・CS 主催の餅つきが行われ、教会内で皆が飲食出来ていた。今となっては遠い昔の出来事のように感

じられる。

2 度目の緊急事態宣言下にあっても、教会が休むことなく、安全に礼拝や集会が守れるよう、長老会ではコロナ対策について注意深く協議を重ねている。例えば、緊急事態宣言下での聖餐の実施可否を検討する際には、『キリスト新聞』に掲載された専門家の見解を踏まえ、十分な対策を講じること

で安全に実施可能と判断した。とはいえ、不安を覚える方は決して無理せず、ご自身の判断で聖餐を見送って差し支えありません。

さて、このようなご時世でも、明るい話題はある。1 月 2 週目の主日礼拝後には、成人祝福式が行われ、1 人の新成人が晴れ着に身を包んで出席した。コロナ禍で思い描いていた大学生活と異なる毎日を送る彼女だが、「当たり前だ」と思っていたことが、幸せなことだと気づけた。そのことを忘れずに、この先後悔しないためにも、

自分が何をすべきかよく考えながら生活したい」と力強く語った。若くしてガンで亡くなった医師の井村和清さんが残した『あたりまえ』という詩に次の一節がある。「こんなすばらしいことを、みんなはなぜよるこばないのでしょうか／あたりまえであることを」

今年は、米同時多発テロから 20 年、東日本大震災から 10 年となる。主の御心は一体どこにあるのかと嘆く一方で、痛い目に遭わないと大事なことに気づけない私。当たり前の有難みを噛みしめ、主とそ

の御言葉に立ち返りたい。

「見よ、兄弟がともに座っている。なんとという恵み、なんとという喜び」(詩編 133・1)。

(原 良介)